

# ふるさと奥尻通信

平成25年2月22日  
奥尻町教育委員会発行  
事務局：01397-2-3890

海洋研修センターと稲穂ふれあい研修センターにて無料配布しています。奥尻町役場ホームページからもダウンロードできます。

## 巻頭語

毎日毎日、雪です。と思ったら、季節外れの暖気で雨。雪が融けていく…。ああ、スキー場が…。油断していると、ドカ雪40cm…。雪踏みと屋根の雪下ろし。この繰り返し繰り返し。これが奥尻の冬さ。

## 特集 奥尻方言のいろいろ①

奥尻では、「まんず、よぐ来たのお。うだでもんだなアー。まんず、よぐこつたら遠いどこさ、わざわざ来たもんだア。」というフレーズで来島者を出迎えております。これは奥尻の浜言葉で、標準的な言葉に置き換えれば、「まずは良く来たねえ。すごいものだね。よくこんな遠いところにわざわざ来たものだねえ。」という風でしょうか。

処変われば品変わると言ひまして、郷土文化の違いとして顕著に表れるのが言葉でしょう。一見狭いような島国日本でも、少し町村をまたげばだんだんと言葉が変化していきます。本州では、県境をこえれば、だいぶ雰囲気は異なってくるものです。

「奥尻島方言」を生む”奥尻島の文化”がどのようにして形成されたのか。奥尻は離島ですので、孤立性はありますが、生活のために海路を利用しての物資の流入と人々の移動が頻りに続けられてきました。近世以降、日本全国の商品と人々が入りしてきたが故に、常に新しい品物が好まれる傾向があったり、文化的土壌が育ちにくくなった可能性が考えられます。



かるたサンプル

奥尻言葉	共通語
わらし	こども
おがる	成長する
あに	長兄
おんちゃ	弟たち
よっこする	よける
ふく	荒天
ほんだ	そうだ
わい!	おっと!

それでも、島内の各集落の起源をたどると、対岸(渡島半島日本海沿岸:島人はムカイと呼ぶ)、本道、東北、北陸などにルーツを見ることが出来ます。移住した人々は、当初は個々に出身地の言葉をしゃべっていた訳ですが、交流を深める中で、次第に共通語を選ぶようになっていき、また集落間の婚姻などにより言語が混ざり合っていきます。これは北海道全体で言えることですが、人口が多く人々の往来が多い場所ほど、その文化は均質化していく傾向にあります。

奥尻の言葉を調べると、やはり道南地方の日本海沿岸で一般的に使用されている言語が中心であり、そこに津軽弁が多く混じっていることから、島には対岸と東北北部(青森が主)からの移住者が多いことの現れなのだと解釈できます。また、同じ青苗地区でも、漁師が住んだ岬先端の集落と、学校などがある山手の集落では話し方が違ったそうです。

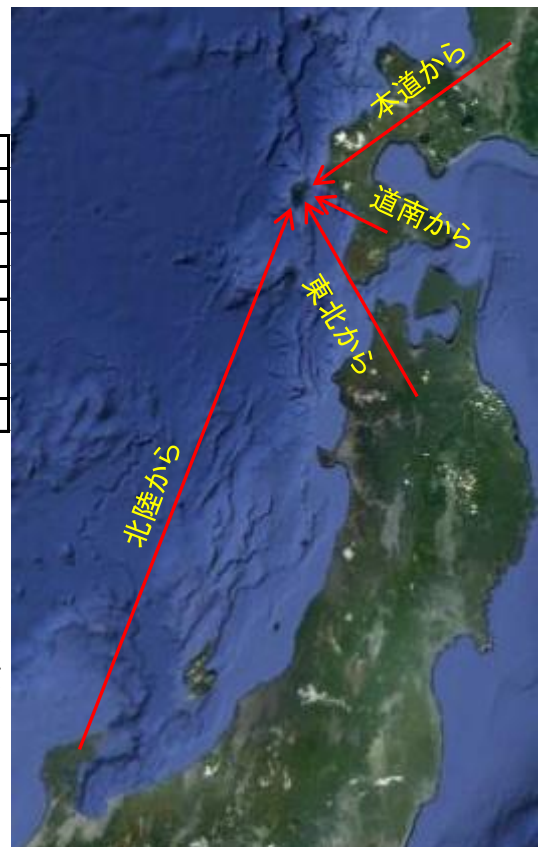
最近ちまたでこんな会話を聞きました。

おばちゃん:「カイベツ買いに行ったっけ、カッポリした」  
わたくし:「え!?, カイベツってなに?」  
おじさんA:「キャベツ買いに行ったら、水たまりに足落とした」  
おじさんB:「カッポリ」って青苗だば使うけど、奥尻だら使わねえ」  
わたくし:「島の中でも、すでに地域の方言があるんですね」  
おじさんA:「ガンジャモッコもダッコンビって言うべさ?」  
わたくし:「ジャガイモとダイコン...?」

こんな奥尻方言を使った特製かるたを作製するプロジェクトが進んでいるようです。完成が楽しみです。



フェリー乗り場でのお出迎え



奥尻島への人の流れ Google Earthより



お見送り また来てね



毎年、冬の奥尻を実感するのは、時化によるフェリーの欠航です。北西風となる冬期間は月に数回は欠航日がでます。生活物資も新聞、郵便も何も届きません。もちろん人の往来もありません。飛行機も欠航すれば完全に孤立状態です。

奥尻と江差や函館との航路は、古くから開かれており、江戸時代には関西と北海道を結んだ北前船、明治期の指定航路定期便、昭和期の道南海運による定期船、米軍の輸送船など様々な輸送が行われていました。

そして、念願のフェリー就航は昭和42年(1967)のことで、「奥尻丸」が奥尻一江差間の輸送にあたりました。これは初めてのカーフェリーで、乗用車22台、バス2台搭載可能な船でした。それでも、現在の「アヴローラおくり」は約2248トン、自動車45台、トラック18台搭載ですので、奥尻丸は小規模な部類でしたが、自家用車での往き来が可能となる画期的な出来事でした。こうして欠航の少ない安定した輸送が実現したのです。

この奥尻丸1/20模型は、奥尻出身で函館在住の宮崎(旧姓井田)幸吉さんが2年の歳月を掛けて手作りした作品です。長く宮津の兄宅にあったものを、修復した上で、平成16年に寄贈していただきました。細部まで丁寧に仕上げ、ドアの開閉や船内の様子まで造作しており、マニア心をくすぐる逸品です。

- ・建造年月日:昭和42年1月、中村造船鉄工(島根県松江市)
- ・就航年月日:昭和42年6月20日、最終就航日:昭和50年1月17日
- ・船長:野田勝明、機関長:鳴海武雄、定員:200名、総トン数:327.61トン
- ・昭和52年、長崎県館浦漁協に売却→第二いきつき丸



初代フェリー奥尻丸の模型 稲穂展示室



就航当日の景況 奥尻港

月刊 奥尻のつり 2月号

今回は潮の話。海には満潮と干潮があります。海水の満ち引きで、海水面が上下します。季節によって潮回りの時間帯が変化します。他に潮の種類が多々あって、干満の差によって「大潮」→「中潮」→「小潮」→「長潮」→「若潮」→「中潮」→「大潮」のサイクルとなります。「大潮」と「中潮」が潮が動き釣れやすい期間ですので、この時期をねらって釣りへ出かけます。ただ、これは一般的な話であって、実際は完全に当てはまる訳ではありません。同じ場所でも季節による違い、釣り方による違いなど様々な要因が重なって、釣れる、釣れないが決まります。一筋縄でいかないところに、海釣りの醍醐味があるのでしょうか。とは言え、根気もいるし、センスもいるし、なにより金がいる、ってことです、はい。

昭和奥尻生活詩 朝 2回

奥尻郡釣石尋常高等小学校一年生「詩集:海に生きる」より

俺陽手う釣兄海木濃風笹笹  
 の一傳んつ助辺々いがのの 朝  
 鋸ぱつとて宗のが空吹葉葉  
 のいて縄来釣方梢にく重にお  
 音なやさいりでの鳶すとさり  
 響中るやばに發ふ飛すしにり  
 くでがめ良行動れんしした  
 ぞ なしいつ機合でとの雪  
 あてなたなふみ落つ 伊  
 がつ音るちて 倉  
 て るあ 鶴  
 た る 雄

降クにた小全くししたザ一  
 参に大会り中島のたて。が月  
 で:雪社、高へ患。、子島中  
 す。のも社で広者最多供内旬  
 冬除あ員学まが初方もでよ  
 。将雪つの級つ見、面大大り  
 軍でた多閉たら青に人流イ  
 参疲とく鎖模れ苗影も行ン  
 つ労かがが様、方響かしフ  
 たも。罹発で次面がかまル  
 ーピさ患生す第で出しエ  
 。いらしし。に多ま

インフルエンザの猛威



曳航されるタンカー

港油一ま接流し止ニスーはが  
 へ漏〇し近さてで〇レマロ発二  
 回れ日たしれい奥頓へリシ信月  
 航もよ。ててた尻積三ーアさ七  
 さなり天錨島の島ー〇ン船れ日  
 れく曳候がので沖で八・籍ま夜  
 ま、航の効一す二し〇アのし、  
 し無をおい。〇た頓ラタた突  
 た事開さて五北km。・イン。然  
 。に始ま停km西を機重ア力発S  
 函、つ止ま風漂関油ン信〇  
 館重たしでに流停八元S

タンカー座礁寸前!

とうとう風邪引きました。私も馬鹿ではなかった証拠です。阿呆なだけだって?うーん、まあそうかもね。足の指はだいぶ良くなってきましたが、まだ若干の痺れが残っていますし、冷えやすくなりました。それにしても、高熱で一人寝込んでいるのも辛いもんです。全国の独身諸氏よ、ガンバイ!あー、スキー大会の豚汁美味かったなあ。女連協の奥様方に感謝。

新米之記録(編集後記)

春タス学交雪家胃イマイスカ結  
 待ンコ校通道ダ腸ンスカキメ局  
 ちカツ統事のニ炎フが不ーム、  
 遠ープ合故運にもル岸漁場シ昨  
 し漂三会死転嚙流エ寄に繁多年  
 い流味議ぜにま行ンりつ盛い並  
 今で線大口はれつザせきしとみ  
 日焦を詰継注なて罹ず残て雪の  
 こつ考め続意いい患、念い多雪  
 のた案で中ではよま注暇残まい雪  
 頃 中す すうす意だ念す?雪

奥尻島短信



奥尻丸出航の見送り 昭和42年頃